

三協化成株式会社

発泡剤を使用した発泡製品は、軽量、保温性、断熱性、緩衝効果など特性を持ち、様々な用途に利用されています。少ない材料で、エネルギーロスを少なく、軽量で輸送負担を軽くするなど、エコ材料としても注目されています。

発泡剤はニッチな業界で、昔は国内に20数社ありましたが、今では3社しか残っていません。基本的にはお客様から依頼されて製造する受け身の営業ですが、時代のニーズを捉え、市場を広げたいと考えています。

当社は、3つの信条を掲げています。自分にもお客様にも「誠実」であること、たゆまぬ「努力」を続けること、努力によって徳を「蓄積」すること。私たちの身の回りにある製品を作るには発泡剤は欠かせないものです。だからこそ、お客様が求める発泡剤を提供することで、世の中のためになれればと思っています。

数少ない発泡剤メーカーとして
市場の拡大に向けて尽力!



三協の歌

一、生駒の山の朝雲を
仰ぎてこゝに 幾年ぞ
光と幸を求めつ、
あゝ三協の 三協の
我等は堅き 仲間達

二、大空の下 手をつなぎ
はげみてこゝに 幾年ぞ
光と幸に あふれつ、
あゝ三協の 三協の
我等は無二の 仲間達

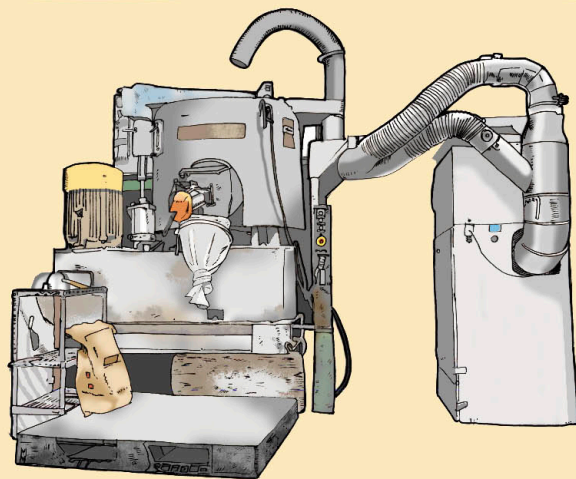
三、生野の里の夕もやを
愛でつゝこゝに 幾年ぞ
光と幸に 輝きて
あゝ三協の
我等

代表取締役社長
井上智裕さん

設立は1957(昭和32)年で、2017(平成29)年に創立60周年を迎えました。

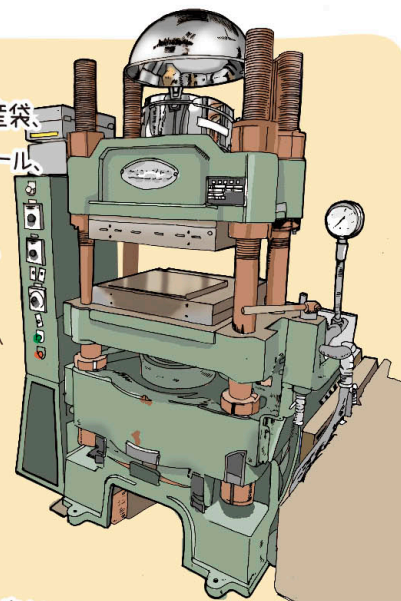
品質保証部は、規制に厳しい化学物質について、お客様からの依頼で調べる。

GHQの文献も参照し、発泡剤の用途を行った。



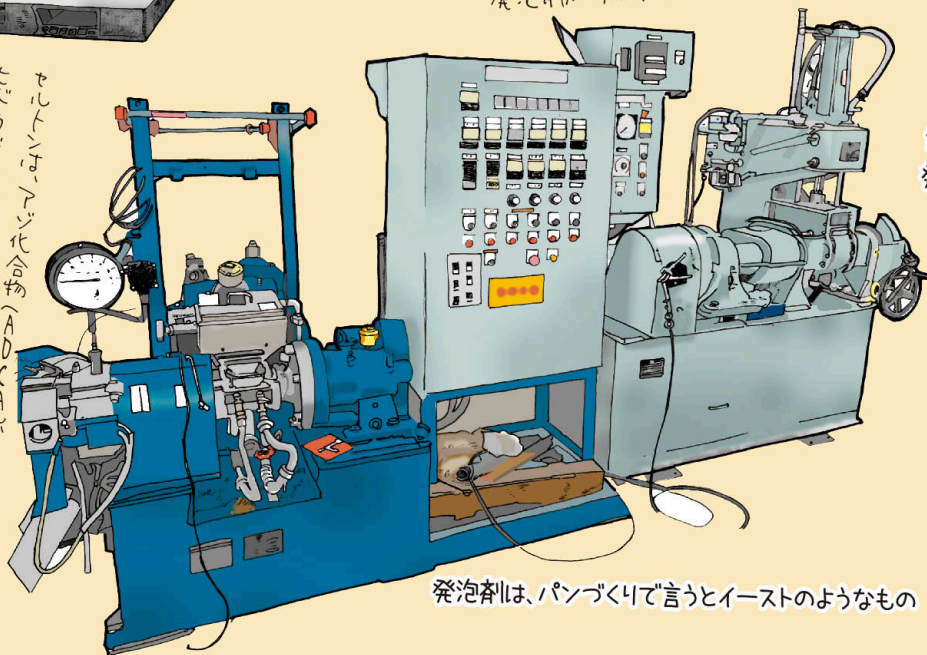
靴底やビーチサンダル、テーマパーク等の土産袋、食品トレイ、断熱材、コピー機などの紙送りロール、漁船のうき、自動車の内装材などさまざまなモノづくりに発泡剤が使われている。

プラスチックを微発泡させることで、やわらかさを出し、いぐさのように仕上げて、公園のベンチの凝木、卓球ラケットの板とバーの間の緩衝材にも発泡剤が使われています。

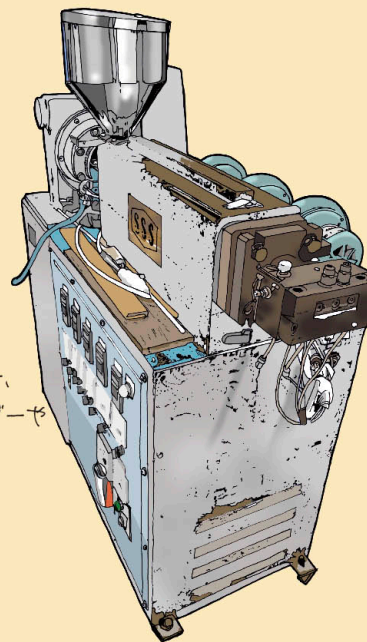


素材、成型方法、必要な機能に応じて、発泡剤も異なる。

従業員は33名。本社20名、姫路工場に13名が勤務。



発泡剤は、パンづくりで言うといーストのようなもの



混合するためのスーパーミキサー、樹脂と発泡剤を混合するミキサーや押し出し機。発泡剤を粉砕する粉砕機などの設備を備える。

我が社の自慢

朝礼で社歌を合唱！

同社には、オリジナルの社歌があり、現在でも毎月1回、朝礼で歌っている。作曲は、昭和30年当時の取締役で、作詞はその取締役の娘さんが手掛けたそう。

戦後すぐに発泡剤の開発に着手 日本で初めて製造に成功した先駆企業

ビーチサンダルや靴底、食品トレイ、果物を保護するフルーツキャップなどを作るために、発泡剤というものが使用されている。発泡剤とは、加熱することで分解され、窒素ガスや炭酸ガスを発生する材料のこと。そのガスによってプラスチックやゴムを膨らませることで、軽量の樹脂製品やゴム製品を作る。三協化成は、国内で3社しかない発泡剤メーカーのひとつだ。

同社の歴史は、戦後のGHQによる支配下の頃にさかのぼる。第二次世界大戦で、アメリカ軍が攻撃に使用していたB29爆撃機のカンタンタンクには、銃弾から守るためのスポンジが付いていた。そのスポンジを国内で生産する計画が進められていたが、スポンジの材料となるゴムを膨らませるものが必要。そこで、現社長の祖父が、1950(昭和25)年に発泡剤の開発に着手し、1952年(昭和27)年、日本で初めて発泡剤の国産化に成功。本格的に生産を開始したのが1955(昭和30)年で、この年に本社を生野区に構えた。

発泡剤には、主に窒素ガスを発生させる有機系と、炭酸ガスを発生させる無機系がある。有機系は、発泡時のガス中に微量ながらアンモニアやホルマリンなどが含まれることがあるため、食品トレイや自動車の内装材などは無機系を使用。では、無機系だけを使用すればと思うが、使い勝手の良さや発泡させる材料の相性などで、有機系の必要性も高い。最終的に、どのような用途で使われる製品かによって、発泡剤も使い分けることになる。発泡剤は熱によってガスが発生し、そのガスをベースとなる樹脂やゴムの中に閉じ込めることで膨らむ。温度が低いとベース素材に粘りが出ず、ガスを保持できずしぼんでしまう。樹脂の粘度が高くなる温度、発泡剤が分解しガスを発生させる温度、その2つのタイミングが重要になる。発泡剤を組み合わせることで、分解温度を変えることも可能。どのような発泡剤が必要かは、ベースとなる樹脂やゴムの素材、成型方法、用途などを聞いて判断しなければならない。

昨今は、工場のまわりに住宅が増え臭いなどの問題があること、海外から安い発泡剤が流入したこともあり、国内でイチから反応させることは難しくなった。そこで、海外から中間体を輸入し、そこに手間を加えてオリジナルの発泡剤に仕上げている。仕上げといっても、ガスを発生させる温度、ベースとなる素材との相性など留意すべきことは多く、そこに長年の技術力が活かされている。時代が流れても、薬剤を反応させて作る発泡剤の作り方は変わらないが、顧客からの要望に応じた製品に仕上げることで、同社への依頼は欠けることなく続いている。

三協化成株式会社

<http://www.sankyo-k.co.jp/>

〒544-0023 大阪市生野区林寺6-7-11

TEL 06-6714-1122 FAX 06-6714-2175

事業内容／ゴムおよびプラスチック用発泡剤・発泡助剤の製造、販売